

はだの歴史博物館 令和5年度企画展



はじめに

令和6（2024）年7月3日、20年ぶりの改刷により、3種類の紙幣が新しくなります。また近年では、キャッシュレス決済の導入や仮想通貨の登場など、一口にお金といっても、そのあり方には大きな変化が生じています。今回の展示では「お金」の役割と変遷を改めて見直すとともに、秦野市内のお金にまつわる話を紹介します。改めてお金について考えるきっかけとなれば幸いです。

「お金」とは

私たちは普段の生活の中で何気なくお金を使用していますが、そもそも「お金」とはどういったものなのでしょうか。日常的にお金と呼ばれるものは、経済用語でいう「貨幣」とほぼ同義です。貨幣とは一般的に次の3つの機能を持つものと定義されます。

①交換機能

商品やサービスを得るための対価として交換され、その媒介となる機能。

②価値尺度機能

交換される商品やサービスの値打ち・価値を計るための尺度としての機能。

③価値貯蔵機能

未来に商品やサービスと交換するための購買力を蓄えておく機能。

以上の3つに加え、決済機能（債務や納税に対する支払い）を含むこともあります。

貨幣の変遷

古代（国家による銭貨の製造と衰退）

7世紀後半になると、国内最古の銭貨とされる富本銭が登場します。富本銭は中国の貨幣を手本にして造られたとされ、貨幣として流通したとする説のほかに、まじない用の厭勝銭であったとする説もあります。

その後、律令国家は和同開珎をはじめとする皇朝十二銭と呼ばれる12種類の銭貨を発行し、流通させました。

しかし、原材料の銅の産出量が減少すると、作られる銭貨は次第に粗悪化・軽小化し、人々の銅銭に対する信用の低下から銭離れが起きました。その結果、天徳2（958）年に発行された「乾元大宝」を最後に、国家による銭貨の発行はしばらく停止することとなります。国家による銭貨の発行が停止すると、米や絹・布などが代わりに貨幣として使用されるようになりました。

じんぐうかいほう
神功開宝

8世紀

中世（渡来銭流入と金銀化の製造）

宋は中国の歴代王朝の中で最も多くの銭貨を製造しており、12世紀半ば以降には貿易により大量の宋銭が日本に流入しました。この時代においても、国家による銭貨の発行は行われませんでした。これらの渡

来銭の使用が人々の間に浸透し、鎌倉幕府も渡来銭の使用を認めるようになります。渡来銭はその種類に関わらず1枚=1文の価値を持つ貨幣として流通しました。



皇宋通宝
12世紀

渡来銭の浸透により年貢の納付が銭貨を使って行われるようになると、それまで納められていた生産物は、各地の市で商品として取引されるようになり、商品経済が発展しました。しかし、流入する渡来銭の量が次第に減少すると、私的に造られた粗悪な模鑄銭もちゅうせんが出回り、人々が種類や形状によって銭貨を区別する撰銭えりぜにが発生しました。それまでの銭貨1枚=1文という価値観は崩れ、地方により銭貨の種類によって価値の差が生じました。そこで、室町幕府や大名は銭貨を使った取引の混乱を収めるため、繰り返し撰銭令を発令しました。



永楽通宝
15世紀

16世紀前半には、灰吹法という精錬技術が導入され、金・銀の産出量が増加しました。各地の戦国大名は領地の鉱山開発に乗り出し、金・銀貨を製造させました。

近世（江戸幕府による貨幣の統一）

徳川家康は、慶長6（1601）年に大きさや重さ、金銀の含有率を揃えた大判、小判、一分金、丁銀、豆板銀の五種類の金銀貨を発行しました。その後、三代将軍家光によって銅銭かんえいつうほう、寛永通宝がつくられると、金・銀・銅

銭による三貨制度が確立しました。

金貨は小判1枚が1両=4分=16朱という単位が設定されたのに対し、銀貨の価値は秤で決められ、重さの単位である貫・匁もんめ・分が用いられました。



寛永通宝
江戸時代

江戸時代には金・銀貨の改鑄（市場に流通している貨幣を回収し、その重さや、金や銀の含有量を変えること）が何度も行われました。これらは貨幣の流通量や物価の調整、改鑄差益による幕府財政の立て直しを目的として行われ、多くの場合において貨幣に含まれる金銀の割合が減らされました。

また江戸時代には初期のお札が誕生します。17世紀には最も古い紙幣である山田羽書や、各藩が貨幣や米などとの交換を保証し領内で通用させた藩札が登場しました。

近代（円の誕生）

明治4（1871）年、明治政府は新貨条例を出し、新たな貨幣単位（円・銭・厘）を導入しました。1円=100銭=1000厘という10進法の単位となり、単位ごとの銭貨も発行されました。

日本銀行の設立

西南戦争の戦費調達を目的とした不換紙幣の増刷により、流通紙幣が増え、紙幣価値は大きく下落しました。安定した通貨・金融制度の確立のため、明治15（1882）年に日本銀行が誕生します。当初は、過剰に流通した不換紙幣を回収することで紙幣価値の回復を図り、設立から2年半後に最初の日本銀行券である「大黒札」を発行しました。

金本位制への移行

19世紀後半には、欧米先進国が銀本位制から金本位制へと移行し、日本でも明治30（1897）年の貨幣法交付によって、金0.75g＝1円の価値で交換がされることが保証され、金本位制が採用されました。これにより紙幣は、従来の日本銀行兌換銀券から日本銀行兌換券となり、金貨との兌換文言が記載されるようになりました。

管理通貨制の導入

世界恐慌の影響で、欧州各国は次々に金本位制から離脱し、日本も昭和7（1932）年に金貨兌換を停止する勅令を施行しました。その後昭和17（1942）年の日本銀行法により、紙幣の兌換文言が消え、名実ともに管理通貨制へ移行しました。



日本銀行券 五円 昭和18(1943)年

新円切り替えと応急措置

昭和21（1946）年、政府は新円切り替えを実施し、戦前の紙幣のほとんどを流通停止にします。しかし、新札の製造が間に合わなかったため、旧券に証紙を貼った証紙貼付銀行券が一時的に流通しました。



日本銀行兌換券 十円（証紙付） 昭和21(1946)年

秦野のお金にまつわるあれこれ

埋められた銭、発掘される銭

秦野市内の遺跡から銭が出土することは多くありませんが、死者に供えられた六道銭などが見つかっています。中でも珍しい事例は、昭和48（1973）年に市内戸川にて、塀の基礎工事の際に見つかった合計1,291枚の出土銭です。藁の繊維が付着していたことから、穴に通して束ねた「銭さし」の状態で見つかったと考えられます。こうした千枚を超える大量の出土銭は、備蓄銭や埋納銭と呼称され、埋められた理由により区別されます。銭を埋めた理由については、貯蔵・貯蓄、戦争や災害からの避難、まじない等の説があります。

描かれたお金ー引札と大黒一

「引札」とは、江戸時代から大正時代にかけて、商品や商店の宣伝を目的として作られた刷り物による広告媒体で、現在のチラシにあたるものです。引札には、目新しいものや話題になっているもの、めでたいものなどが色彩豊かに載せられました。また、商売繁盛のイメージから、お金そのものや大黒天がモチーフとして取り上げられることも多くありました。大黒天は七福神の一柱で、財産や商売に御利益をもたらす神様とされ、日本銀行が初めて発行したお札である日本銀行兌換銀券にも採用されています。



引札（玉川屋） 大正8(1919)年

秦野の金融

明治14(1881)年に設立された共伸社は「貸付金預り金等ノ取引」を目的とした銀行類似会社であり、秦野での銀行の先駆けとなりました。その後、銀行条例の発布により銀行への転換を迫られると、明治25(1892)年に相模銀行へと名を変え、業務を引き継ぎ、翌年開業した秦野銀行と並んで、秦野の最初期の銀行となりました。昭和の金融恐慌に際しても、両銀行の経営は揺るぎませんでした。戦時体制下においては金融統制の強化から、昭和16(1941)年に横浜興信銀行(現横浜銀行)に営業譲渡され、今日に至っています。

丹沢から金が出た？！

錢貨の原料には、腐食に強く錆びにくく、加工が容易で打刻・打延しやすいといった特性から金・銀・銅などの貴金属類が選ばれてきました。和同開珎の発行や16世紀の金貨・銀貨の登場など、金属貨幣の製造は、原材料を供給する鉱山開発と密接な関係がありました。実は私たちの身近にも鉱山があったといわれています。昭和初期の新聞には、丹沢山地に金脈が見つかったという記事がしばしば登場します。それによると、場所は表丹沢の中心に位置する塔ノ岳で、試掘の許可が県に出されたことや、実際に金が出たことが読み取れます。

戦争とお金

戦時中になると、政府はさまざまな債権を発行しました。「戦時貯蓄債権」は戦費の調達を目的として国民に売り出され、償還の際に利子付きで返すことを謳った国債でした。また、「支那事变行賞賜金国庫債券」は、昭和12(1937)年に勃発した日中戦争に出征した兵士に対する報奨として発行さ

れた有価証券です。当時の政府財政は莫大な戦費に圧迫され、兵士に現金で報奨金を支払う余裕がなく、代わりに国債として配布されました。終戦を迎えると、急激なインフレや賜金国庫債券を無効とする法律が制定されたことにより、これらの債権は紙クズ同然となってしまいました。



「支那事变行賞
賜金国庫債券」

昭和15(1940)年

これからのお金のはなし

令和6(2024)年7月の改刷では、肖像の刷新と新たな偽造防止技術・ユニバーサルデザインの導入が行われ、お札が大きく変わります。当市においても、市役所窓口へのキャッシュレス決済に対応したセルフレジの設置や、令和6年度冬の電子地域通貨導入を目指した計画が策定されるなど、お金に関する様々な取組が行われています。

お金のはなしあれやこれ
—お金をとおして見る秦野の歴史—
令和6年1月13日(土)~3月17日(日)

—協力—
お札と切手の博物館
日本銀行金融研究所 貨幣博物館
はだの浮世絵ギャラリー

〒259-1304 秦野市堀山下 380-3
はだの歴史博物館
TEL : 0463-87-5542
FAX : 0463-87-5794